

# 風

宮田守男  
⑩ (現場)からの

10月下旬、信州大学医学部保健学科中学校舎教室で開催された、ケア集団ハートビートが主催する「看取りについて考える」の講座に

参加する。ケア集団ハートビートは、「悲しみ」に温かい地域社会を目指して、ひとの生老病死について考える活動を展開する団体だ。地域で活躍するゲストを招き、それぞれの活動への想いや内容を、ゆっく

## 看取りについて考える事で、改めて地域を見つめてみませんか

りと話していただき参加者が考える機会を大切に企画した講座だ。大切な人を亡くし、悲しみのあまり眠れない、食欲がない、孤独感をひしひしと感じる、でも誰かと話したいとの想いを聞く機会が近年多くなってきている。この

「深い悲しみ」や「悲嘆」を意味する言葉が「グリーフ」。大切な人を失った時に起きる身体上・精神上の変化で喪失に対する自然な反応は、個人差はあるが誰もが通る道だ。今回の講師は、二木

はま子さん。小海町出身で、信州大付属病院や飯田市立病院の看護師を経て、特別養護老人ホームで看護師長兼所長補佐を務めた70歳。だが、生まがいを持つて過かしているためか若さが伝わって人々の最後に寄り添う「みどりケア」をテーマに研究。飯田市で「いのちと看取りの講座」を企画。「相手を否定しない。励まさない。説教しない」を原則に活動を展開。悲しみを表出する事が大事。それが心の整理につながる。活動の狙いを熱く語る。



信州大学医学部保健学科山崎浩司准教授とこの研究が多くの人を支えてほしいと思う講師。

自分の最後を自分でデザインする文化をつくるための講義内容。医療・経済が発展する以前の日本に「看取りの文化」が存在し、地域・家族で助け合いながら自宅で自然に最後を迎え、家族介護で看取りが次の世代に引き継がれたとの内容に参加した学生に「まだ看取りの体験は無いし、大学生活の為、祖父母から離れて生活。就職したら同居は不可能」と祖父母との今後の接し方についてアドバイスを求められる。「帰郷した時、祖父母の人生を聞いてあげる事が始めると、満足できたとの人生観を祖父母に抱かせる」と話す。

2025年から大量死の時を迎え、病院や施設も満床。自宅で死を迎える社会で今後地域の取り組みが益々求められるだろうと感じた講座でもあった。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)